

2023年 2月12日(日) 関東学院教会 主日礼拝 説教要約

説教「愛しなさい」 マタイによる福音書 22章34-40節 高橋彰

◆復活についての問答

22 ₃₄ ファリサイ派の人々は、イエスがサドカイ派の人々を言い込められたと聞いて、一緒に集まった。₃₅ そのうちの一人、律法の専門家が、イエスを試そうとして尋ねた。₃₆ 「先生、律法の中で、どの掟が最も重要でしょうか。」₃₇ イエスは言われた。「『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』₃₈ これが最も重要な第一の掟である。₃₉ 第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』₄₀ 律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている。」

聖書 新共同訳(C)日本聖書協会 Japan Bible Society, Tokyo 1987,1988

イエスはエルサレム神殿の境内で神について教えておられるのを群衆は喜んで聞き入りました。ユダヤ教の指導者たちは苦々しく思いながら、対立する立場を超えてタッグを組んでイエスを論破し、貶めようとして次々に論争を仕掛けました。神殿で自分たちが権限を持っているゆえに偉いと自認している者たち、律法の専門家だと自負し神の教えについてよく知っていると考えていた者たちが次々にイエスに挑みましたが、逆にイエスによって自分たちの思考や態度、矛盾などが暴かれて論破されてしまいました。

サドカイ派の人びとが言い込められたと聞いて、ファリサイ派の人びとが結集します。そして一人の律法の専門家を送り込みました。そして「イエスを試そうとして」質問をします。すでにイエスは彼らの悪意を承知していて、18節で「偽善者たち、なぜわたしを試そうとするのか」と指摘しています。「試す(ペイラゾー)」という言葉はイエスの宣教活動開始の前にも使われています(4:1)。悪魔は「誘惑する者(試みる者:ペイラゾーン)」と呼ばれます(4:3)。マタイはイエスに挑む者たちを試みる者たちだと同定しているようです。彼らがどれだけ知識を持ち、権力を持ちながら、その知恵と力を結集して行おうとするのはイエスを試み、罠にかけることでした。神の教えと知恵を使って、一人の人を陥れ、罪を探し、攻撃することを求めていた。そして自分たちで裁きをしてイエスを十字架につけるのです。神の教えの追求が、自分たちを正当化し、他の人を殺すためにも用いられる。その行為と思考がすでに罪に囚われた姿であることが露にされています。

そのように挑む者たちからの「最も重要な掟は何か」という問いに、イエスは「神を愛し、隣人を自分のように愛しなさい」と答えられたのでした。

イエスの答えの前半は申命記6:4, 5の引用です。「聞け(シェマー)、イスラエルよ」と始まり、イスラエルの民が親から子へ、繰り返し、家庭で教え受け継ぐべき重要な教えとして語り継いできたものです。皆知っている常識の言葉でした。全身全霊で神を愛するとは、自分自身が神の教えに具体的に生きるということでした。目には見えない神がおられ、自分を生かしてくださっていることを自覚し、心の内側から喜びと感謝にあふれて、神の意に応えて自分の人生をその意の道に生きようとしていることだと言えるでしょうか。さらにイエスはレビ記19:18の言葉を添えます。「復讐してはならない。民の人々に恨みを抱いてはならない。自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。わたしは主である。」

神を愛することは、具体的に隣人を愛することであり、それは自分自身を愛するようにするのだと。この三つの愛が不可分であるとイエスは教えられました。

愛の行為において、つまり自分を与え、相手の内部へと入っていく行為において、わたしは自分を、いや相手と自分の両方を、そして人間を、発見する。」

対象と自分はつながっているのであるから、他者への愛と自己愛とを分割することはできない・・・利己的な人は、自分を愛しすぎるのではなく、愛さなすぎなのである。いや実際のところ、その人は自分を憎んでいるのだ・・・たしかに利己的な人は他人を愛せないが、同時に、自分のことも愛せないのである。

(エーリッヒ・フロム『愛するということ』1956)。

ドイツの心理学者・哲学者であったエーリッヒ・フロムは、愛を「つながり」であることを指摘しています。そしてそれは、愛を宿す自分を深く信頼することと結びつくというのです。